◆書評◆

シンシア・エンロー著／佐藤文香監訳

『〈家父長制〉は無敵じゃない　日常からさぐるフェミニストの国際政治』

（岩波書店　2020年　ISBN 9784000614252　2900円＋税）

児玉谷　レミ
（一橋大学大学院　社会学研究科）

序章において、本書の執筆動機は次のように記されている。彼女を執筆に向かわせたのは、ドナルド・トランプという規格外の政治家による家父長制的な陰謀に目を奪われ、それに拘泥することが、家父長制的な関係性を存続させている、より目立ちにくく、陰湿なものへの探求を忘れさせてしまうという懸念である。なるほどその問題意識のとおり、国境や時代を超えて、ややもすれば見落としてしまいそうな仕方で、家父長制がどのように維持され、人々はどのように抵抗してきたか、エンローの「フェミニスト的好奇心」は描き出していく。

その記述の丹念さゆえに、なかなか話が展開しないように感じる読者もいるかもしれない。エンローがこのような執筆スタイルを選んだのは、おそらく些末で家父長制と無関係に思える日常の出来事に目を配ろうとしたからであろう。本文中で、彼女はフェミニストの学びは劇的なひらめきとしては訪れず、何時間も、何日も、傾聴、観察、そして内省を積み重ねたうえに得られると主張しており、この執筆スタイルはまさにそれを体現している。本書は序章から終章までの十章から成る。

第一章は、2016年のアメリカ大統領選挙の結果を受けたウィメンズ・マーチの描写から始まる。エンローは同時期にヨーロッパなどで行われていたウィメンズ・マーチやデモに話を広げていきながら、その参加者たちが闘っていたそれぞれの家父長制のあり方を描き出す。あわせて本章では「家父長制の持続可能性」というキーワードが用いられ、あらゆる事例を引きながら、いかにして家父長制が存続しているのか示される。

第二章では、シリア紛争と和平交渉のプロセスに焦点が当てられる。エンローは自身が招待されたシリア和平交渉の様子を日記の形で記していく。家父長制が露骨にあらわれるシリア紛争のなかでは、多くの

DOI：10.24567/0002000126

女性活動家たちが市民活動を展開し、紛争がジェンダー化されていたことを明らかにした。彼女たちが家父長制の存続を回避する仕方で和平合意にたどり着くために働きかけていたことが語られる。

第三章は、エンローが国際政治をフェミニスト的に理解することを試みた最初の著作である『バナナとビーチと軍事基地』の改訂作業を題材に、国際政治を成立させる家父長制をひも解いていく。グローバルに展開される基地や労働、外交などが成立するにあたり、それは階層化された「男らしさ」や「女らしさ」に依拠していることが示される。

第四章の主題は、軍事化されたツーリズムである。この章では、戦跡が観光地となり、女らしさと男らしさ、両者の不平等な関係性についての家父長制的理解を持続させている側面が指摘される。そこでは、エンロー自身の過去を振り返って軍事化されたツーリズムへの自らの「居心地の悪い」共犯について記述がなされ、エンロー個人の経験にもフェミニスト的な分析が向けられる。

「歴史というのはたんに『過去』のことではない。それは現在、そして未来のことだ」(87頁)という記述からはじまる第五章は、戦争物語を中心として、歴史の語られ方と家父長制の持続に焦点が当たる。歴史が語られるとき、何が重要でないこととして排除されるのか、誰によってその語りが担われるのか。そのことを注意深く観察する歴史家たちの営みを記述しながら、歴史をどのように語り何を記憶に残そうとするのかが家父長制を維持するか解体するかを決定づけるとエンローは述べる。

第六章では、国際政治と結婚の関係にフェミニスト的好奇心が向けられる。カナダ・ハリファクスで軍事主義に反対する活動を展開する女性たちとの語らいから始まるこの章では、軍人の妻に焦点が当たる。彼女たちが軍人である夫を支える存在として軍事化を成立させるのに大きな役割を果たしているにもかかわらず、政治学の領域では結婚は私的領域のこととして論じられてこなかったことが指摘される。

第七章は、エンローのフェミニストとしてのライフストーリーを描く。「フェミニストへのまがりくねった道」という章タイトルに象徴されるように、それは一筋縄ではいかないものだ。いったい何が重要ではないとみなされ、何が語られずにいるのか明らかにしようとする、エンローのフェミニスト的好奇心の軌跡が描かれる章といえる。

第八章ではある対比的な立場に置かれた女性たちの労働環境への平等を求めた闘いが描かれる。ランチ・レディとして低賃金で働き家庭を支える、ボストンはエバレットの女性たちの賃金平等をめぐる運動。そして国連事務局で働く女性たちの労働環境をめぐる運動である。

終章では家父長制の脆弱さが語られる。家父長制はつねに更新されながら存続してきたが、それはフェミニストたちが絶えず家父長制の網の目を断ち切り続けてきたからであるともいえる、とエンローは述べる。つねにフェミニスト的好奇心を持ち続け、フェミニスト的な問いを投げかけ続ければ、家父長制には勝ち目がない、と力強い言葉で締めくくられる。

このように本書では、いかに日々の出来事に家父長制が入り込み、更新されながら維持されてきたか、同時にどれだけの抵抗があったのかつぶさに記述される。長きにわたってフェミニスト的好奇心を保ち続け、それを共有する活動家や研究者たちとの交流を持ち、一見家父長制やジェンダーとは無関係に思える事象にも切り込んできたエンローだからこそなせたことである。家父長制が形を変えて持続するさまが丹念に描かれるがゆえに、絶望感を抱く読者もいるかもしれない。しかしエンローは随所で、「家父長制は無敵ではない」と繰り返す。どのように家父長制が持続してきたかを明らかにすることでその解体に効果的に取り組むことが可能になると、各章で力強くそう述べる。

家父長制に問題意識を持つ人々、その問題意識を行動に移している人々にとって、本書の内容はいわば応援歌と呼べるようなものかもしれない。過去に、そして現在世界中で家父長制と闘う人々を描き出し、「家父長制は無敵じゃない」ことを示してくれる本書は、現状の手ごわさにくじけそうなときにその背中を押してくれる。

本書への要望を加えるとしたら、すでに問題意識を持ち行動に移している人たちだけでなく、家父長制の解体に関心を抱けずにいる人々、フェミニストの名を引き受けることに躊躇がある人々にさらに届く書き方ができたのではないか、ということである。エンロー自身もそうした人々の存在は意識していると思われ、日本語版の序文には家父長制を魅力的だと思う少女・女性たち（「日本語版への序文」v-vi）への言及がある。

評者はこれまで、講演などの機会を得てフェミニズムについて語るとき、特に若い人の間で戸惑いや葛藤にしばしば直面した。今まで当たり前に受け取ってきたことを揺るがされる際、それをポジティブな原動力にできる人もいれば、自分を不必要に苦しめてしまう人もいる。そのような人々にとって、家父長制の存続はフェミニスト的好奇心の欠如、注意力の不足、怠慢というエンローの言葉はいささか辛辣に響き、彼ら彼女らを家父長制解体の取り組みから遠ざけてしまうかもしれない。もっともこの要望は、評者自身もまた、その答えをもとめて道筋を探っていかなければならない課題でもある。家父長制が無敵ではないからこそ、どうすれば戸惑う人々とも手を取り合って解体に向かっていけるのか、本書を読んで改めて考えさせられた。ぜひ一読をおすすめしたい。